

1918年米騒動に関する考察

—脚気統計と残飯屋から学ぶ—

高野 昭 雄

目次

1. はじめに
2. 脚気統計
 - (1) 戦争と脚気
 - (2) 白米食へのあこがれ
 - (3) 道府県別脚気統計
 - (4) その他の脚気統計
3. 残飯屋の消長
 - (1) 残飯屋の概略
 - (2) 最盛期の残飯屋
 - (3) 大戦景気と残飯屋
 - (4) 京都における残飯屋
4. 最も米を食べた時代
5. おわりに

1. はじめに

1918年夏の米騒動に関する研究史については、井岡康時による整理・分析がある⁽¹⁾。先行研究は、第一次世界大戦期（1914～1918年）の好景気もたらした物価高によって、被差別部落住民など貧困層の生活が窮乏化していたことを指摘してきた。その結果、米騒動の原因として、一般的には、貧困層の困窮が中心にあつかわれてきた。シベリア出兵（1918年8月開始）をみこした商人たちによる米の買い占めが、さらなる米価の急激な上昇をもたらした⁽²⁾、その結果、貧困層の生活難が深刻化したことが、強調されてきたのである。

こういった先行研究に対し、原田敬一は、大阪市を中心とした新聞史料等にもとづいて、大戦景気にともない、むしろ都市下層の生活水準が上昇していたことを、今から約25年前に指摘している。本当に貧困層の生活難が進行していたのかどうか、その内実を再検討することの必要性を提唱し、「貧民や細民中心の米騒動像」に疑問を投げかけた⁽³⁾。しかし、

(1) 井岡康時「大正デモクラシーと部落問題」（黒川みどり編『部落史研究からの発信 第2巻 近代編』部落解放・人権研究所、2009年）。

(2) 本稿では、京都市を主たる分析対象地とする。京都市における一石あたりの標準米価は、1918年の1月には26.5円であったが、米騒動が勃発した8月には42.0円に、さらに12月には45.0円にまで上昇していた。京都市『京都の歴史8—古都の近代』（学藝書林、1975年）356頁、表24。

(3) 原田敬一「米騒動研究の一視角——『生活難』をめぐる」（『部落問題研究』第99号、1989年5月）。

原田の研究以後、こういった視点から貧困層の生活そのものを分析する研究はあまり進展してこなかった。

そこで本稿では、米騒動期における日本人の生活実態を、その食生活から捉え直す基礎的な作業を行いたい。その上で、米騒動について、①なぜ富山県の漁師町・港町一帯で発生したのか、②なぜ大都市、それも東日本よりも、関西をはじめとする西日本の大都市で大きな騒動となったのか、③なぜ都市の中でも貧困層が騒動の担い手となったのか等、従来半ば自明なこととみなされてきた基本的な諸問題について、再度考え直してみたい。

研究方法としては、まず第一に、脚気統計を分析することにより、日本全国の米を中心とする食文化について考察する。当時の都市と農村の食生活には、今では考えられないような大きな違いがあったこと、また同じ都市でも、西日本と東日本ではその食生活に差があったことなどを数量的に示したい。第二に、残飯屋に関する行政史料や新聞史料から、都市最貧困層の食生活について論じる。大戦景気が、当時の都市貧困層に与えた影響について考えることにより、日本人全体の食生活を検討する。こういった分析を通して、日本近代史全体の中で、米騒動期が時代の転換点としてもつ重要性について考えたい。

本稿では、京都の地元紙、『京都日出新聞』（現京都新聞の前身）の記事を特に多く用いる。それは、富山県の沿岸部ではじまった米騒動が、京都市で大きな騒動になることによって、全国的に広がったからである。京都市は、被差別部落住民が米騒動の中心となり、軍隊が全国で最初に出動することになったことでも知られている。米騒動において京都は非常に重要な都市で、当時から全国的騒動の「発源地」とされていた⁽⁴⁾。

なお、本稿の表記については以下の通りとする。

- 一、引用史料中の差別的表記は、その歴史性に鑑みてそのままとした。
- 二、引用文での〔 〕は引用者の注、□は判読不明の文字を示す。
- 三、引用文中の波線は引用者によるものである。

2. 脚気統計

(1) 戦争と脚気

脚気は、食物中のビタミンB₁の欠乏によって起こる病気である。症状は、下肢からはじまって歩行障害が起こり、次第に上部へと進行する。甚だしい場合は、心臓肥大をもたらし、急性の心不全により死亡するが、これを脚気衝心という⁽⁵⁾。

ビタミンB₁は、玄米や麦類には含まれているが、白米には殆ど含まれていない。そのため、江戸時代から明治時代にかけて、麦飯や玄米食が普通であった農村では脚気は殆ど見られなかった。逆に、白米食が一般化しつつあった江戸など都会で多い病気であり、「江戸患い」とも言われていた。幕末から明治にかけて、脚気衝心によって亡くなった人物に

(4) 井上清・渡部徹編『米騒動の研究 第5巻』（有斐閣、1962年）26～27頁。

当時の新聞記事にも、「京都から参つた自分〔明石民蔵〕は何しろ昨年来米騒動の発源地と云ふ所から東京では注意を惹いたと見へて其原因に就き諸名士や新聞記者諸氏から種々御尋ねを蒙りました」と京都が米騒動の発源地であったことが記されている。「旧来の陋習を破れ／＼而して一種の迷信的／＼因習観念を一掃せよ／＼同情融和大会の土産談」『京都日出新聞』1919年2月26日。

(5) 『南山堂 医学大辞典』（南山堂、第19版、2006年）。新村出編『広辞苑』（岩波書店、第6版、2008年）。

は、13代将軍徳川家定、14代将軍徳川家茂、皇女和宮などがおり、明治天皇も脚気に悩まされていた⁽⁶⁾。

明治時代以降は、白米の精白度が高まり、米の水洗いも丁寧になって、脚気が一層広がるようになる⁽⁷⁾。脚気は、塩辛い少量の副食物で、主食物の米を大量にとる当時の都会を中心とした食生活がもたらす病気であり、肺結核と並んで二大国民病とされていた。後にビタミンという栄養素が発見されるが、当時はまだ脚気の原因がわかっていなかったのである。

脚気が最も猛威をふるったのは対外戦争においてであった。当時の軍隊は、白い米を腹一杯食べるのでできる場所でもあったからである。脚気患者や脚気死者は、白米食にこだわった陸軍に多発した⁽⁸⁾。1894年にはじまる日清戦争（全戦死者約13,000人）では、戦闘による死者約1,400人に対し、脚気による死者が4,000人を超え、脚気患者は40,000人以上になっていた。戦闘による死者よりも、脚気による死者の方がはるかに多かったのである。また1904年にはじまる日露戦争（全戦死者約84,000人）では、脚気による死者が何と27,000人を超え、脚気患者は25万人以上になっていた⁽⁹⁾。

自然主義文学の作家、田山花袋は、日露戦争で従軍記者をつとめ、戦争中における脚気患者の悲惨さを、小説『一兵卒』（1907年作）に描いている。以下、やや長くなるが、引用させていただきたい。

頭脳^{あたま}がぐらぐらして天地が廻転するようだ。胸が苦しい。頭が痛い。脚の腓^{ふくらはぎ}の処が押附けられるようで、不愉快で不愉快で為方がない。ややともすると胸がむかつきそうになる。不安の念が凄じい力で全身を襲った。と同時に、恐ろしい動揺がまた始まって、耳からも頭からも、種々の声^{こゝろごゑ}が囁いて来る。

〔中略〕

「苦しい！ 苦しい！ 苦しい！」

続けざまにけたたましく叫んだ。

「苦しい、誰か……誰かおらんか。」

と暫^{しばら}くしてまた叫んだ。

強烈なる生存の力ももうよほど衰えてしまった。意識的に救助^{たすけ}を求めると言うよりは、今は殆ど夢中である。自然力に襲われた木の葉のそよぎ、浪の叫び、人間の悲鳴！

「苦しい！ 苦しい！」

その声がしんとした室に凄^{すさま}じく漂い渡る。

〔中略〕

「苦しい！ 苦しい！ 苦しい！」

寂^{せき}としてゐる。蟋蟀^{こおろぎ}は同じやさしいさびしい調子で鳴いている。満洲^{こうぼく}の広漠たる野

(6) 板倉聖宣『模倣の時代（上）』（仮説社、1988年）などを参照。

(7) 板倉聖宣『模倣の時代（下）』（仮説社、1988年）566頁。

(8) 同上、183頁。

(9) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第11巻』（吉川弘文館、1990年）。山下政三『鴉外森林太郎と脚気紛争』（日本評論社、2008年）111～115頁、301～303頁。板倉聖宣、前掲『模倣の時代（下）』37～40頁、160～161頁。

には、遅い月が昇ったと見えて、^{あたり}四辺が明るくなって、硝子窓の外は既にその光を受けていた。

叫喚、悲鳴、^{かれ}絶望、^{あごひも}渠は室の中をのたうち廻った。軍服の^{ボタン}釦は^{はず}外れ、^{あたり}胸の^{かき}辺は搔むしられ、軍帽は^{あごひも}額紐をかけたまま押潰され、顔から^{おうと}頬に懸けては、嘔吐した汚物が一面に附着した⁽¹⁰⁾。

(2) 白米食へのあこがれ

当時の戦争は、脚気による多くの悲劇を生んだ。このため脚気に関する先行研究は、日本の軍隊、中でも白米食にこだわった陸軍と逆に食事を切り替えた海軍について、あるいは脚気研究とビタミンが発見された経緯について、詳細に論じてきた⁽¹¹⁾。しかし、地域別の脚気統計から、日本各地における食生活と脚気について分析する基礎的な作業は、60年以上前に行われた¹² 山政子の研究の後、管見の限り十分には行われてこなかった⁽¹²⁾。そこで本稿では、国勢院編『大正7年日本帝国死因統計』（以下、『死因統計』と略す）を用いて、当時の日本における食生活を米食中心に考察していく。

表1は、大正時代における脚気死亡者数を一覧にしたものである。ちなみに大正時代は、年間脚気死亡者数が日本史上最も多くなった時代である⁽¹³⁾。1914年から1918年にかけてが第一次世界大戦期である。この間、日本の脚気死亡者数は、1914年の9,689人から1918年の23,632人へと急増している。大戦景気の下、日本人の生活水準が上昇し、一人当たり米消費量が増加していたことが読み取れる。

当時の日本人にとって、白米食へのあこがれは、現在では考えられないほどに強かった。大戦景気時には、女工争奪戦が活発に行われたが、細井和喜蔵『女工哀史』は、次のような女工員入用の宣伝ビラを紹介している。

○食事は、会社から多額の補助金を出して、白飯と、おいしい副食物を、一日僅か、金十二銭で、賄います、他には、壱銭も掛りません。〔東京モスリン紡織株式会社亀戸工場〕⁽¹⁴⁾

ちなみに、同じく『女工哀史』には、次のような記述もある。

(10) 田山花袋『蒲団・一兵卒』（岩波文庫、第12刷、2012年）。

(11) 山下政三『明治期における脚気の歴史』（東京大学出版会、1988年）。同『脚気の歴史——ビタミンの発見』（思文閣、1995年）。同、前掲『鷗外森林太郎と脚気紛争』。板倉聖宣、前掲『模倣の時代（上）（下）』など。

(12) 60年以上前の研究ではあるが、山政子が疾病地理学の立場から、脚気死亡の分布と米作地・工業地・都会地・漁業地との関係を検討している。山政子「日本に於ける脚気の疾病地理学的研究（第1報）」（『地理学評論』第21巻第7・8号、1948年）。同「疾病地理学の方法論——脚気の分析過程を中心として」（『地理学評論』第22巻第6・7号、1949年10月）。同「日本に於ける脚気の疾病地理学的研究（第2報）」（『地理学評論』第22巻第9号、1949年12月）。同「日本に於ける脚気の疾病地理学的研究（第Ⅲ報）」（『地理学評論』第24巻第6号、1951年6月）など。

(13) 板倉聖宣、前掲『模倣の時代（下）』第8章を参照。

(14) 細井和喜蔵『女工哀史』（岩波文庫、第52刷、1994年）71～72頁。同書、改訂初版は1925年発行。

表1 脚気死亡者数（大正期）

西暦（年）	大正（年）	脚気死亡者数（人）
1912	1	4,750
1913	2	5,633
1914	3	9,689
1915	4	11,292
1916	5	16,476
1917	6	14,794
1918	7	23,632
1919	8	11,378
1920	9	14,239
1921	10	22,675
1922	11	19,162
1923	12	26,796
1924	13	18,333
1925	14	13,909
1926	15	12,109

出典：内閣統計局編『日本帝国統計年鑑』（各年版）より筆者作成。

注：1）表作成にあたり、板倉聖宣『模倣の時代（下）』（仮説社、1988年）547～549頁、を参考にさせていただいた。

2）植民地は除く。

○彼女たちの中には必ずや二十パーセントくらい、脚気でだぶだぶに膨れた、板一枚の継ぎ目にも躓くような脚をひっさげて、はっはっとながら泣きの涙で働いている者がある⁽¹⁵⁾。

『死因統計』（有業者・女）によると、「綿、糸、織物、編物等の製造業」では、死亡1,000人中、30.3人が脚気で死亡していた。これは有業者（女）平均の約5倍の高さである⁽¹⁶⁾。女子職工の食事には、外米が混ぜられることも多かったが、米騒動直前、1918年6月の『京都日出新聞』には、大戦景気下、その外米ですら忌避されていたことを示す次のような一文が記されている。

○「米価論（下）」

田舎から都会に出て労働でもして居る者は旨い米の飯を食ふと云ふ事を唯一の楽〔し〕みとして居る、都会に来て労働して外国米を食ふ位なら、山の中に居つて稗か

(15) 同上、161頁。

(16) 国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』（1921年、比例の部）50～53頁。

麦でも食つて居る方がました、

(『京都日出新聞』1918年6月29日夕刊)

上記新聞記事には、田舎から都会へ出て行く人々の唯一の楽しみが、白米食だったとまで記されている。宮本常一によると、1920年からの10年間で、なぜ人口が減ったかについて、近畿地方山村の役場へアンケート調査を行った結果、「都会へ出ると米が食べられるから」と答えた者が、かなりの数に上ったという⁽¹⁷⁾。当時、農村の一般食であった麦飯には、下等の食べ物であるとの意識があり、「麦」という悪口があったほどである⁽¹⁸⁾。小中学校で、麦飯や外国米混入の弁当が、児童生徒の嘲笑的となることもあった⁽¹⁹⁾。当時の日本人がもつ白米食への憧憬は相当強いものであった。

表2が示すように、当時米は、その生産量の約半分が商品として販売されていた。それに対し、大麦・裸麦は、その生産量の約86～95%が農家自家消費用であり、商品として市場に出回る量は多くなかった。この表2は、当時の農家が、全国平均で、米100に対し、大麦・裸麦を約35、麦飯にするなどして消費していたことも示している。逆に都市居住者など米の購入層は、米100に対し、大麦・裸麦を約4しか食べていなかった。麦飯を食べることは、殆どなかったのである。

以上述べてきたように、麦飯を常食とする農村居住者は、白米を常食とする都市生活者に対し、しばしば強いあこがれをもっていた。当時は大戦景気により工業が発展し、都市人口が増大していた。そのことが、一人当たり米消費量の増加と脚気患者の急増をもたらしていたのである。

この時代、日本人の米消費量は、一人一日、玄米約3合(=これは年1石にほぼ相当)であり、さらに大麦・裸麦・雑穀の消費量が玄米の22%程度あった⁽²⁰⁾。つまり米など穀物の消費量は、子供・老人を含めて、一人一日3合半～4合弱であった。宮沢賢治が、一日

表2 米・大麦・裸麦の農家自家消費率(1920年)

	農家自家消費量(トン)	市販量(トン)	農家自家消費率
米	3,586,602	3,773,549	48.73%
大麦	522,328	26,740	95.13%
裸麦	723,166	116,650	86.11%
大麦・裸麦/米	34.73%	3.80%	

出典：篠原三代平『個人消費支出(長期経済統計6)』(東洋経済新報社, 1967年)より筆者作成。

注：1) 米は、白米換算。

2) 植民地は除く。

(17) 宮本常一・潮田鉄雄『食生活の構造』(柴田書店, 1978年)15～16頁。福本恭子「戦前における労働者の食事——工場の食事(社員食堂)と福利厚生との関係」(『経営研究』第62巻第3号)132～133頁。

(18) 原田敬一『国民軍の神話——兵士になるということ』(吉川弘文館, 2001年)154～156頁。

(19) 「児童に節米宣伝/弁当を見て嘔ふ悪習を除け/と文相口語体の訓示」『京都日出新聞』1919年7月31日。

(20) 篠原三代平『個人消費支出(長期経済統計6)』(東洋経済新報社, 1967年)により、1920年の統計を用いて計算した。米など穀物1石(1000合)を150kgとした。後掲表11を参照。

に玄米4合と味噌と少しの野菜を食べていたことは有名である⁽²¹⁾。米1合を茶碗2杯とすると、玄米4合は茶碗8杯になる。一日に食べる量として、現在の我々からすると、かなり多い量ではあるが、当時の副食物は、一汁一菜、漬物(野菜)と味噌汁程度のことも多かった。玄米4合は2000kcal強程度であり、当時の激しく身体を動かす農作業を考えると、これだけでは不足であったと考えられる。ちなみに、高度成長期1965年における日本人の米消費量は、一人一日白米約2合、2012年で一人一日白米約1合である⁽²²⁾。

また先に示した表1によると、米騒動翌年の1919年に、脚気死亡者数が大きく減少している。これは、米騒動直後に成立した原敬内閣による麦飯奨励政策によるところが大きい。米騒動の苦い経験から、当時の新聞も節米や麦飯奨励に関する記事をしばしば掲載した。例えば、原首相の「米麦混食の奨励⁽²³⁾」が刊行された翌月、1919年2月における京都日出新聞には次のような見出しの記事がある。「食糧問題大会／麦飯常用期成会」(14日夕刊)、「麦飯奨励決議」(17日夕刊)、「節米の実験／大津実女校の催し」(25日)、「米調節の檄文／八商業会議所一斉に起ち／京都にて郵送二万に上る」(27日)、「府庁吏員の／麦飯弁当」(28日)。

こういった官民挙げての麦飯奨励運動により、1919年の脚気死亡者数は大幅に減少した。しかし、翌1920年には上昇に転じ、1921年の脚気死亡者数は、1918年とほぼ並んでしまう。そして表1が示すように、1923年には脚気死者数が、戦時を除くと日本史上最高値になる26,796人に達した。その後1920年代中頃に、脚気ビタミン欠乏説が学問の世界ではほぼ確立され、さらに1933年になって、脚気ビタミンB₁欠乏説は確定する⁽²⁴⁾。そのため、脚気死者数もゆるやかに減少していくが、1930年代後半になってもまだ年間1万人以上の死亡者がいた⁽²⁵⁾。それだけ、日本人の白米食にこだわる食文化は、なかなか変化しなかったのである。なお陸軍省が、主食に麦飯混用を制度化したのは、1937年に日中戦争がはじまった後、兵士の大量動員が実施された1938年のことであった⁽²⁶⁾。

(3) 道府県別脚気統計

表3は、米騒動の起きた1918年における死因順位別死亡数を一覽にしたものである。脚気は、肺結核と並んで二大国民病とされていたが、死因順位では20位となっており、同3位の肺結核とは大きな差があった。

しかし、肺結核の致死率(数十%以上)と脚気の致死率(1~2%)には大きな違いがあったため、患者数では、肺結核よりも脚気の方が格段に多かった。脚気の患者数は100万人をはるかに超えていた。しかも、脚気は、好んで青壮年男子を冒す特性をもっていた

(21) 宮沢賢治「十一月三日(雨ニモマケズ)」[1931年発表]に、「一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野菜ヲタベ」とある。谷川徹三編『宮沢賢治詩集』(岩波文庫、第27刷、1973年)325~327頁。

(22) 農林水産省ホームページ「食糧自給率に関する統計」(<http://www.maff.go.jp/j/tokei/sihyo/data/02.html#y1>)〈2014年6月21日〉の数値を用いて、米1石(1000合)を150kgとして計算した。

(23) 原敬「米麦混食の奨励(1919年12月発表、1920年1月刊行)」。原敬全集刊行会『原敬全集上巻』(原書房、1969年)1108~1121頁による。

(24) 山下政三、前掲『脚気の歴史——ビタミンの発見』第6章。同、前掲『鴉外森林太郎と脚気紛争』457頁。

(25) 板倉聖宣、前掲『模倣の時代(下)』548頁。

(26) 原田敬一、前掲『国民軍の神話——兵士になるということ』173頁。

表3 死因順位別死亡数（1918年）

（単位：人）

順位	死因（中分類）	死亡数
1	肺炎及気管支肺炎	205,533
2	下痢及腸炎	145,381
3	肺結核	99,215
4	脳出血及脳軟化	85,995
5	老衰	82,073
6	不明の診断	74,825
7	脳膜炎	72,036
8	流行性感冒	69,824
9	畸形及先天性弱質	69,691
10	腎臓炎及ブライト氏病	57,473
11	心臓の器質的疾患	43,880
12	慢性気管支炎	40,768
13	癌	39,433
14	胃の疾患	38,099
15	爾他の呼吸器の疾患	33,460
16	爾他の神経系の疾患	30,725
17	爾他の外因に依る死	26,763
18	腸結核	26,623
19	急性気管支炎	24,319
20	脚気	23,632
21	腹膜炎（産に因するものを除く）	20,293

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』（1921年）より筆者作成。

注：1）死亡数20,000人以上の死因を一覧にした。

2）スペイン・インフルエンザが流行したため、他年度と比較して流行性感冒による死亡数が多くなっている。

3）植民地は除く。

ことから、社会の労働力ならびに軍隊の徴兵義務におよぼす影響はより大きいものであった⁽²⁷⁾。

さらに、表4と表5によると、道府県によって、「全死因に占める脚気の死亡割合」に非常に大きな差があったことがわかる。この「全死因に占める脚気の死亡割合」を、以下「脚気の死亡割合」と略して論じていく。ちなみに「死亡率」の用語は、総人口における死亡者の割合を指すので、本稿では用いない。

(27) 山下政三、前掲『明治期における脚気の歴史』315～328頁。同、前掲『鴉外森林太郎と脚気紛争』11～12頁。

表4と表5が示すように、脚気の死亡割合が高い大阪府・京都府・東京府と、逆に低い沖縄県・埼玉県・山梨県・栃木県では、その割合に約10～30倍の差があった。同じ日本とは思えないほどの違いである。東京府と埼玉県は、隣接する自治体であり、現在ではほぼ一体化した都市圏を構成しているが、当時、脚気の死亡割合には、10倍以上もの差があったのである。

これは当時において、東京と埼玉というよりは、都市と農村の食生活が大きく異なっていたことによる（前掲表2参照）。農村では、貧農だけではなく、東京周辺の比較的豊かな地主の家でも、麦飯が常食であった。それに対し、東京の下町では、それほど裕福でない職人の家でも多くは白米飯であった。これは、江戸時代以来の習慣だという⁽²⁸⁾。渋谷定輔『農民哀史』は、麦飯を常食とする埼玉県の農村と外食文化が勃興する東京との、当時における食文化の違いを浮き上がらせている⁽²⁹⁾。

当時多くの農村では、主食は麦飯であった。麦の割合は、地方による差が大きく、約20～80%であったが、経済成長の中、麦飯中の米の混合比は、高まる傾向にあった⁽³⁰⁾。山村部ではさらにアワ・ヒエなどの雑穀を米に混ぜて食べていた。

ここで、表4と表5について、さらに詳しく分析したい。まず表4から検討する。表4は、脚気の死亡割合が高い道府県を一覧にしたものである。

表4に示した8の道府県のうち、大阪府（1位）・京都府（2位）・東京府（3位）・兵庫県（6位）・神奈川県（7位）の5府県については、一瞥して都市人口率の高さが明らかである。実際、1920年『国勢調査』のデータによると、全47道府県のうち、これら5府県のみが、市部人口率30%以上となっている⁽³¹⁾。ちなみに全47道府県を対象にして、脚気の死亡割合と、市部人口率との関連を調べたところ、有意な正の相関関係が認められた（ $r=0.763$, $p<0.001$ ）⁽³²⁾。

また残る北海道（4位）・高知県（5位）・富山県（8位）の3県は、いずれも漁業が盛んで、かつ大麦・裸麦の生産が活発ではないという共通点があった。1920年の統計により、人口当たり大麦・裸麦の生産高が下位3分の1に入る15の道府県を対象にして、人口当たり漁獲物価額が高い道府県を調べると、1位北海道・2位高知県・3位富山県の順になる⁽³³⁾。脚気は、漁師町で多い病気であった。ちなみに市部人口率の高い5府県を除いた42

(28) 江原絢子「大正・昭和初期の食生活——地域による日常食のちがいを中心に」（『東京家政学院大学紀要』第36号、1996年7月）。

(29) 渋谷定輔『農民哀史』（勁草書房、1970年）は、1925～1926年にかけての生活状況を丹念に描いている。なお同書については、駒木敦子「渋谷定輔著『農民哀史』にみる大正時代の食生活」（文教大学『生活科学研究』第27号、2005年3月）が詳しく分析している。

(30) 養蚕業の発達により現金収入が増加するとともに、雑穀畑の桑畑への転換が進行したことなどによる。江原絢子、前掲「大正・昭和初期の食生活——地域による日常食のちがいを中心に」。

(31) 第1回の国勢調査である内閣統計局『大正9年国勢調査報告』には、全道府県について、市部と郡部、それぞれの人口が掲載されている。

(32) 脚気による死亡の割合は国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』、市部人口率は内閣統計局『大正9年国勢調査報告』による。

(33) 大麦・裸麦の生産高は国勢院編『日本帝国第40統計年鑑』、漁獲物価額は統計局編『第41回日本帝国統計年鑑』、人口は内閣統計局『大正9年国勢調査報告』による。人口統計は、国勢調査がはじまった1920年に、以前よりも正確になった。

表4 全死因に占める脚気の死亡割合が高い道府県（1918年）
 (表中の数字は、全死亡数を1,000とした場合の脚気による死亡数)

順位	道府県名	男	女	計
1	大阪府	82.0	39.0	61.1
2	京都府	54.3	26.0	40.2
3	東京府	39.3	24.3	31.9
4	北海道	39.4	20.8	30.8
5	高知県	42.5	16.1	29.7
6	兵庫県	41.8	15.9	29.0
7	神奈川県	29.5	15.3	22.6
8	富山県	29.4	15.9	22.5
	日本（内地）計	21.5	10.0	15.8

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』（1921年、比例の部）より筆者作成。

注：1）全死亡数を1,000とした場合の脚気による死亡数（男女計）が、20.0以上の道府県を一覧にした。

2）植民地は除く。

表5 全死因に占める脚気の死亡割合が低い道府県（1918年）
 (表中の数字は、全死亡数を1,000とした場合の脚気による死亡数)

順位	道府県名	男	女	計
1	沖縄県	3.0	1.4	1.9
2	埼玉県	3.5	1.5	2.5
3	山梨県	3.6	1.8	2.7
4	栃木県	4.4	1.8	3.1
5	熊本県	5.1	1.7	3.4
6	群馬県	4.0	3.1	3.5
7	茨城県	4.8	3.0	3.9
	日本（内地）計	21.5	10.0	15.8

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』（1921年、比例の部）より筆者作成。

注：1）全死亡数を1,000とした場合の脚気による死亡数（男女計）が、4.0未満の道府県を一覧にした。

2）植民地は除く。

の道府県を対象にして、脚気の死亡割合と、人口当たり漁獲物価額との関連を調べたところ、有意な正の相関関係が認められた ($r=0.584$, $p<0.001$)⁽³⁴⁾。

『死因統計』(有業者・男)によると、「漁業及び製塩業」では、死亡1,000人中、69.7人が脚気で死亡していた。これは「農業、牧畜、養蚕等並びに林業及び狩猟」の約9倍、有業者(男)平均の約2.5倍の高さである。また同じく「船舶運輸業」では、死亡1,000人中、104.9人が脚気で死亡していた⁽³⁵⁾。このことは、米騒動が富山県沿岸部で発生した背景の一つを示している。当時の漁師や仲仕たちは、長時間にわたる激しい肉体労働のため、米を多食していた。米騒動が発生した富山県の漁師町では、主食の米について、「一日に一升〔10合〕を食べないと船がこげぬ」とまで言われていたのである⁽³⁶⁾。

当時、大麦・裸麦が商品として出回る量は限られており、米を商品として購入する漁師や仲仕たちが、麦飯を食べることは稀であった(前掲表2参照)。次の記述は、新潟県を根拠地としたサケ漁に関するものである。長時間労働の中、一日4～5回の食事があり、握り飯などの形で、一人一日平均1升2合の白米を食べたという。

○サケ漁の最盛期には、寄り来るサケの漁獲に漁場の漁夫たちはほとんど不眠不休で働いた。夜は11時に仕事が終わって12時に寝ても、朝3、4時にはたたき起こされた。何より睡眠不足が苦痛であったという。こうした繁忙期の漁夫の食事は1日に4、5回あり、1日平均1升2合の白米を食べた。時に魚体にぬめる手をぬぐう間もなく握り飯を食べて仕事を続けることもあった。漁師たちの食事は白米が中心で、白米は存分に食べられたという。一方で野菜がなく、脚気にかかる者が毎年多数出た⁽³⁷⁾。

次に、脚気の死亡割合が低い道府県を一覧にした表5を検討する。表5に示した7の道府県のうち、1位の沖縄県では、当時米ではなく、甘藷(さつまいも)が主食となっており⁽³⁸⁾、米騒動は一カ所も起きていない⁽³⁹⁾。また埼玉県(2位)・山梨県(3位)・栃木県(4位)・熊本県(5位)・群馬県(6位)・茨城県(7位)の6県は、すべて大麦・裸麦の生産が活発であり、かつ漁業が盛んではないという共通点をもっていた。

1920年の統計により、人口当たり大麦・裸麦の生産高が上位3分の1に入る15の道府県を対象にして、人口当たり漁獲物価額が少ない道府県を調べると、1位埼玉県・2位山梨県・3位群馬県・4位栃木県と内陸県が並び、5位茨城県・8位熊本県の順になる⁽⁴⁰⁾。ちなみに全47道府県を対象にして、脚気の死亡割合と、人口当たり大麦・裸麦の生産高との

(34) 統計史料については、注(32)(33)に同じ。

(35) 国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』(1921年、比例の部)50～53頁。

(36) 「米だけに頼って生きた時代」『朝日新聞』1998年6月30日夕刊。大門正克・安田常雄・天野正子編『近代社会を生きる』(吉川弘文館、2003年)279～283頁。

(37) 新潟市歴史博物館編『新潟の鮭』(新潟市歴史博物館、2005年)24頁。

(38) 「日本の食生活全集沖縄」編集委員会編『日本の食生活全集47 聞き書 沖縄の食事』(農山漁村文化協会、1988年)310頁。

(39) 井上清・渡部徹編『米騒動の研究 第1巻』(有斐閣、1959年)88頁。

(40) 統計史料については、注(33)に同じ。なお8位の熊本県は、人口あたり的大麦・裸麦の生産高が、日本全国の道府県中、第3位であった。

関連を調べたところ、有意な負の相関関係が認められた ($r = - .403, p < .01$)⁽⁴¹⁾。

以上、粗い分析ではあるが、脚気は、都市部および漁業の盛んな地方に多い病気であり、大麦・裸麦の生産が盛んな地方には少ない病気であったことを、おおよその傾向として把握することができた。

(4) その他の脚気統計

すでに表4・表5で示したように、脚気は女性よりも男性に多い病気であった。

表6・表7は、当時における青年層の死因を、地域性は考慮せず、男女別を一覧にしたものである。男性の15～20歳においては、全国値でも、脚気の死亡割合は相当に高く、死因の第3位になっており、その死亡割合は、女性の約5倍であった。脚気は、特に男子青年層をむしばみ、結核と並んで二大国民病とされていたことを再確認したい。

次の表8は、1918年における男性の死因を、大阪市、京都市、東京市について、一覧にしたものである。ちなみに先に示した表4で、脚気の死亡割合が日本で最も高い道府県は、この3市が属する大阪府・京都府・東京府の順であった。

この表8は、都市の男性にとって、脚気がいかに身近で恐ろしい病気であったかを如実に示している。大阪市(男)では、全年齢を合計しても、肺結核よりも脚気で亡くなる人の方が多く、何と死因の1割以上が脚気であった。大阪市(男)では、死亡18,549人中、2,035人(約11%)が脚気による死亡であった⁽⁴²⁾。仮に脚気の致死率を1～2%とすると、大阪市(男)では、脚気患者が10～20万人いたことになる。当時、大阪市の人口(男)は約67万人であった⁽⁴³⁾。つまり、大阪市の男性は、その約15～30%が脚気患者だったことになる。この数字にもあらためて驚かされる。

表6 男15～20歳の死因 (1918年)

順位	死因 (中分類)	(%)
1	肺結核	230.4
2	肺炎及気管支肺炎	142.3
3	脚気	113.1
4	流行性感冒	58.3
5	腸結核	57.6

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』(1921年、比例の部)より筆者作成。

- 注：1) 表中の数値は、全死亡数を1,000とした場合の死亡数。
2) スペイン・インフルエンザが流行したため、他年度と比較して流行性感冒による死亡数が多くなっている。
3) 植民地は除く。

(41) 統計史料については、注(32)(33)に同じ。

(42) 国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第二編』(1921年)4～13頁。

(43) 内閣統計局『大正9年国勢調査報告』による。

表7 女15～20歳の死因（1918年）

順位	死因（中分類）	(%)
1	肺結核	302.9
2	肺炎及気管支肺炎	141.3
3	腸結核	106.7
4	流行性感冒	56.3
5	腹膜炎（産に因するものを除く）	37.5
12	脚気	22.5

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第一編』（1921年，比例の部）より筆者作成。

- 注：1）表中の数値は，全死亡数を1,000とした場合の死亡数。
 2）スペイン・インフルエンザが流行したため，他年度と比較して流行性感冒による死亡数が多くなっている。
 3）植民地は除く。

表8 男性の死因（1918年）

順位	大阪市		京都市		東京市	
	死因（中分類）	(%)	死因（中分類）	(%)	死因（中分類）	(%)
1	肺炎及気管支肺炎	171.4	肺結核	101.1	肺結核	152.4
2	脚気	109.7	肺炎及気管支肺炎	98.7	肺炎及気管支肺炎	105.9
3	下痢及腸炎	92.2	脚気	78.7	下痢及腸炎	84.9
4	肺結核	82.4	流行性感冒	74.1	腎臓炎及ブライト氏病	66.0
5	脳出血及脳軟化	49.6	下痢及腸炎	67.7	脳出血及脳軟化	58.1
6	腎臓炎及ブライト氏病	47.2	脳出血及脳軟化	52.3	脚気	45.7
7	流行性感冒	37.4	腎臓炎及ブライト氏病	45.3	畸形及先天性弱質	38.3
8	畸形及先天性弱質	37.1	不明の診断	40.7	脳膜炎	37.7
9	心臓の器質的疾患	31.9	畸形及先天性弱質	36.4	癌	31.4
10	不明の診断	30.2	慢性気管支炎	34.3	不明の診断	30.4

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第二編』（1921年，比例の部）より筆者作成。

- 注：1）表中の数値は，全死亡数を1,000とした場合の死亡数。
 2）スペイン・インフルエンザが流行したため，他年度と比較して流行性感冒による死亡数が多くなっている。

また表8によると、同じ大都市でも、東日本の東京市より、西日本の大阪市、京都市の方が、脚気の死亡割合が高かったことがわかる。これは、当時東日本よりも西日本の大都市で、白米食にこだわる食文化が強かったことを示唆している。

表9は、1918年における脚気の死亡割合（男女総合）が高かった10の都市を一覧にしたものである。表9で特に注目したいのは、上位5都市である。これら5都市はすべて関西をはじめとする西日本の都市であり、大阪市（1位）・門司市（2位）・神戸市（4位）・京都市（5位）では、激しい米騒動が起きていた。また下関市（3位）の米騒動は、警察力の動員もあり大きな騒動とはならなかったが、近隣の宇部では、炭鉱で非常に激しい騒動が起きている。ここでは関西をはじめとする西日本の都市部で、東日本以上に白米を食べる食文化が一般化していたことを確認したい。そして、そういった状況も背景の一つとなり、西日本で大規模な米騒動が起きていたのである。

脚気は、男子青年層に多い病気であった。脚気は、また大都市、中でも西日本の大都市に多い病気であり、さらに漁師や仲仕にも多い病気であった。それは、それだけ漁師町や港町、あるいは西日本をはじめとする都市部で白米が多食されていたことを示す。そして、米騒動は富山県の漁師町・港町一帯で発生し、東日本よりも西日本の大都市で、より大き

表9 全死因に占める脚気の死亡割合が高い都市（1918年）

	都市名	(道府県名)	脚気死亡割合	米騒動発生日	軍隊の出兵日
1	大阪市	(大阪府)	81.9	8/11~17	8/12~17
2	門司市	(福岡県)	70.3	8/15~16	8/16
3	下関市	(山口県)	64.2	8/16	8/16
4	神戸市	(兵庫県)	59.8	8/11~14	8/13~20
5	京都市	(京都府)	57.7	8/10~12	8/11~13
6	函館(区)	(北海道)	57.5	—	—
7	横須賀市	(神奈川県)	54.9	8/15~16	—
8	和歌山市	(和歌山県)	53.3	8/13~14	8/14
9	富山市	(富山県)	52.9	8/8, 10~14, 16~17	—
10	堺市	(大阪府)	46.6	8/12~14	—

出典：国勢院編『大正7年日本帝国死因統計 第二編』（1921年、比例の部）、および井上清・渡部徹編『米騒動の研究 第1巻』（有斐閣、1959年）より筆者作成。

注：1）人口5万人以上の市が対象（但し北海道等は区制）。

2）脚気死亡割合の数字は、全死亡数を1,000とした場合の脚気による死亡数（男女計）。

3）脚気死亡割合の対象市部平均値が44.2である。この平均値を上回る10都市を一覧にした

4）植民地は除く。

な暴動となっていったのである。

井上清・渡部徹編の大著『米騒動の研究』（全5巻）は、「米騒動は、近畿、山陽、東海および四国がとくに激烈であり、とくに関西が全国的騒動の発源地であった」としながら、「騒動の地域的分布状態が何にもとづくかは、多方面からの慎重な研究を要する」と論じ、米騒動がなぜ関西をはじめとする西日本に多かったのかについて、疑問を投げかけ、研究上、今後の課題だとしている⁽⁴⁴⁾。

本稿では、脚気多発地域と米騒動の地域的分布との関わりを述べてきた。もちろん脚気の地域性がそのまま米騒動の地域性と結びつくような単純なものではない。当然のことながら、それぞれの地域の特性に応じた地域研究が必要になる⁽⁴⁵⁾。職業についても、例えば炭鉱労働者や土木建築労働者なども視野に入れて、別途精密な検討をする必要がある。ただ本稿のような、脚気統計から、日本全体を視野に入れて米騒動を考えてみるという作業も、従来行われてこなかった分析方法であり、一つの視点として提示させていただいたのである。

3. 残飯屋の消長

（1）残飯屋の概略

明治時代、東京の貧困者密集地に、軍隊から出る残飯を売る残飯屋が登場したことは、松原岩五郎『最暗黒の東京』や横山源之助『日本の下層社会』などのルポタージュによって知られている。残飯屋が売る残飯は、東京では「兵隊飯」と呼ばれていた⁽⁴⁶⁾。

『最暗黒の東京』は、「老幼男女の貧人」らが、残飯を積んだ荷車が到着するや否や、残飯屋に殺到する様子を、次ページの図に示した挿絵とともに、次のように記している。

○我れ先^{ママ}きにと^{かたこし}策、岡持を差^{いだ}し出し、二銭下さい、三銭おくれ、これに一貫目、^{ここ}茲へも五百目と肩越^{めんつう}に面桶^{わき}を出し腋下より銭を投ぐる様は何に譬えん、大根河岸、魚河岸の朝市に似て、その混雑なお一層奇態の光景を呈せり⁽⁴⁷⁾。

残飯を残飯屋の手に渡すため、兵営の炊事当番は、残飯の飯と菜を区別していた⁽⁴⁸⁾。買えばすぐ食べられる残飯は、調理のための燃料代もかからず至便であったし、労働者は「南京米を食ったのでは腹に力が入らず労働は出来ない」と言って、外米より残飯を好んだともいう⁽⁴⁹⁾。大正期において、残飯の値段は白米時価の約3分の1であった⁽⁵⁰⁾。

先行研究は、明治中期から大正初期にかけての残飯屋、つまり最盛期の残飯屋については、しばしば取り上げてきた。しかし、逆に大正中期から昭和にかけて残飯屋が消滅して

(44) 井上清・渡部徹編、前掲『米騒動の研究 第1巻』88頁。

(45) 例えば富山県の米騒動を対象とした研究には、井本三夫『水橋町（富山県）の米騒動』（桂書房、2010年）など、多くの優れた研究がある。

(46) 松原岩五郎『最暗黒の東京』（岩波文庫、1988年）41頁。同書、民友社版は1893年発行。

(47) 同上、42～43頁。

(48) 東京市社会局『残食物需給に関する調査』（1923年、調査時は1922年）120頁。

(49) 大豆生田稔『お米と食の近代史』（吉川弘文館、2007年）62頁。

(50) 東京市社会局、前掲『残食物需給に関する調査』（1923年）123～124頁。



出典：松原岩五郎『最暗黒の東京』（岩波文庫、1988年）
43頁。

同書、民友社版は1893年発行。

図 残飯屋

いく過程については、約25年前に原田敬一⁽⁵¹⁾が大阪市を主な舞台にして論じた後、殆ど論じられてこなかった。本稿では、原田の研究を土台にして、さらに残飯屋が最も多かったと思われる東京の行政史料で補強しながら論じる。大戦景気時に、都市貧困層が残飯を食べなくなっていったことを指摘したい。

なお、東京の行政史料としては、第一次大戦後に発行された、東京市社会局『残食物需給に関する調査』（1923年および1930年）を中心史料として用いる。この史料は、残飯に焦点をしばった詳細な調査であり、しかも1920年代と1930年代の2度にわたって調査を行っているのにも関わらず、管見の限り、先行研究で殆ど利用されてこなかった。やや引用が長くなる箇所があるが、本稿で紹介させていただきたい。

（2）最盛期の残飯屋

1886年に書かれた記事「府下貧民の真況⁽⁵²⁾」が、当時の東京で貧困者密集地として知られていた芝新網町や四ツ谷鮫ヶ橋町の残飯屋について記している。明治10年代の後半には、もう残飯屋があったのである。

その後1892年には、松原岩五郎が、実際に四ツ谷鮫ヶ橋町に入り込んで、残飯屋の下男として働きながら調査を行い、『最暗黒の東京』を著した。日清戦争がはじまる頃には、残飯を求める人々が、以前より増加していたようである。

さらに日露戦争後になると、残飯は都市貧困層の間でさらに人気となっており、残飯屋の前には長時間の行列ができるほどであった。次の行政史料は、そういった状況を描いている。

(51) 原田敬一、前掲「米騒動研究の一視角——『生活難』をめぐる」。

(52) 中川清編『明治東京下層生活誌』（岩波文庫、1994年）所収。

○1906年頃の状況

又芝区新網〔網〕町 K 某残飯店の如きも、歐洲大戰以前の當時に於ては一日六十貫の残飯を僅に一時間余りで売尽せる日が屢々であつて、曾て明治三十九〔1906〕年安楽兼道氏の警視總監であつた頃、同總監は此新網の貧民窟を視察するとき、偶々此区某方の店頭に多数の人々の群がれるに不思議を懷き仔細を訊ねると、貧しき人々が残飯を需める為にかくも雑踏するとの事情が判明したので、其悲惨な生活には同總監も驚いて特に K 某方に立寄り一伍一汁を聴取り細民日常生活の内容を知つたそうであるが、此等の談話を総合して観るも、歐洲大戰以前殊に十年前までは残飯の需要者が如何に多数であつたか⁽⁵³⁾、

○1909年頃の状況

歐洲大戰開始以前と大戰当時二ケ年位までは残飯を需むるもの却々多く、之れが事情に関し軍隊より出る残飯を鬻ぐ四谷区旭町、N 某方の談によれば、今から十五年以前から大正五〔1916〕年々末頃までの需給状況は同人方だけで一日五十貫の残飯を売尽し、殊に明治四十二〔1909〕年は需要者多数に上り店頭に行列をなせる日さへあつて、恰も停車場に於ける乗車券購求に似たるもの、如く順番にて需めたるほど、需要量は多くして、細民の妻女などは店頭に数時間佇立し軍隊より飯と菜の到着するを待ちながら、内職の麻糸つなぎをなして時間の到るを待つなど悲惨な状態を見たものである⁽⁵⁴⁾、

1909年頃には、「細民の妻女」が「内職の麻糸つなぎ」をしながら、残飯の到着を待っていたというのである。また上記史料が記しているように、残飯に対する食用としての需要は、第一次世界大戦がはじまっても、1916年頃までは相当なものであった。

(3) 大戦景気と残飯屋

貧困者密集地における残飯屋の人気も、大戦景気が本格化するとともに一変する。第一次世界大戦がはじまっても2年間ほどは、残飯に対する需要は相変わらず大きかった。しかし、1917年頃になると都市最貧困層の生活水準も上昇し始め、残飯の主食物としての需要は減少していったのである。

○今日〔1922年〕に於ての数量は頗る減少したのであつて、其比率は大正五〔1916〕年末頃に比すれば十分の三位の需要量に過ぎぬさうで（主食物としての数量）而して斯の如くに残飯の需要減少せる所以は、戦時〔1914～1918年〕我国生産的事業の発展と細民の経済的生活の向上とに因ること勿論である⁽⁵⁵⁾、

○「然るに大正の初年代から俗に云ふ茹出し「うどん」と称する拾銭に十五個位のうどんが売出されたので細民にして此れを需めるものが多くなり、更に歐洲大戰の影響に由り労働界は漸く殷賑を来せるので、細民階級の人々も稍々生活の緩和を来し従つて残食物を需めるものも減少したのである。然るに一方市内各方面に於て養豚業を営む

(53) 東京市社会局、前掲『残食物需給に関する調査』（1923年）144～145頁。

(54) 同上、144頁。

(55) 同上、145頁。

ものが逐年其数を増したので、斯る畜産方面に於て軍隊其他から出る残食物を購ひ養豚の餌に用ゐるやうになつた⁽⁵⁶⁾。

第一次世界大戦が終わると、残飯の主食物としての利用は戦前の約3割になっていた。残飯は、都市貧困層の食料としては需要が急減する。代わりに、豚肉の消費量が増加し、残飯は養豚の餌として利用されるようになっていった。ちなみに、日本全国における豚の飼養頭数は、1910年が約28万頭、1915年が約33万頭、1920年が約53万頭であった⁽⁵⁷⁾。大戦景気時に、豚肉の需要が大きく伸びていたのである。なお、残飯が養豚の餌になるようになったため、以前のように残飯と残菜とを区別する必要がなくなり、混ぜたまま供給されるようになった⁽⁵⁸⁾。

第一次世界大戦期の好景気は、1917年頃から日本社会全体に大きな変化をもたらしはじめていた。農業生産額よりも工業生産額が多くなり、都市への人口流入が促進された。いわゆる都市中間層と呼ばれるような人々も増加した。乳児死亡率が大きく低下し始めたのも、この頃からである⁽⁵⁹⁾。また人手不足の中、1917年に植民地朝鮮から日本に渡る朝鮮人労働者が急増し、その後も増え続けた⁽⁶⁰⁾。そして、人口が急増する都市では、最も貧しい層までもが、白米を常食とするようになっていったのである。

○細民は主食物にありては、内地米飯に執着するの風ありて、外米、麦飯、残飯を採る事を欲せざるもの多し、又副食物にありては味噌汁、乾塩魚、野菜、漬物、佃煮等を多食し、魚獣生肉の調理に用ひらるゝは甚だ少しと云ふ⁽⁶¹⁾。

表10は、東京の細民を対象にした主食物の調査である。この表10も、大戦景気を経て、

表10 主食物調査（京橋、芝、下谷、深川4区の細民）（1920年）（単位：人）

内地米		米麦混用		時々麦混用其他		時々残飯うどん等		合計	
人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率	人数	百分率
253	88.5%	30	10.5%	3	1.0%	0	0.0%	286	100%

出典：東京市社会局『東京市内の細民に関する調査』（1921年、調査時は1920年）72頁。

注：原資料の百分率は修正した。

(56) 東京市社会局『残食物需給に関する調査』（1930年、調査時は1930年）24～25頁。

(57) 日本統計協会編『日本長期統計総覧 第2巻』（日本統計協会、1988年）82頁。

(58) 東京市社会局、前掲『残食物需給に関する調査』（1923年）120頁。

(59) 松崎重広「日本の平均寿命はなぜ延びたのか」・板倉聖宣「〈乳児死亡率の低下〉の始期」（『たのしい授業』第259号、2002年11月）74～89頁。

(60) 樋口雄一『日本の朝鮮・韓国人』（同成社、2002年）55頁。

なお、朝鮮半島から日本に渡る人々は、脚氣予防にビールを飲むことがあった。張錠壽『在日六〇年・自立と抵抗——在日朝鮮人運動史への証言』（社会評論社、1989年）42頁。同書の記述については、川口祥子氏に御教示いただいた。

(61) 東京市社会局『東京市内の細民に関する調査』（1921年、調査時は1920年）73～74頁。

都市貧困層の生活水準が向上し、彼らがもはや残飯、そして外米すら食べなくなった状況を示している⁽⁶²⁾。

(4) 京都における残飯屋

次に米騒動の発源地である京都における残飯屋の状況を、当時の新聞記事から確認していく。最初の記事は、第一次大戦前の1912年のものである。東京と同様、残飯屋が大変な人気だったことが記されている。なお記事中的一貫町は、当時の京都で貧困者密集地として知られていた⁽⁶³⁾。

○「米の高い影響（三）／市内の貧民窟（上）」

此の残飯とは如何なるものであろうか〔。〕軍人どもが食つた残りの飯を連隊の炊事場では一所に集めて売却する〔。〕是を買取る者は大略定つてみて市内に持帰り、水気のない固い物は岩おこしの原料に売り、水に湿つてダブダブになつてる物は手桶に一杯五銭から十銭ほどの価で貧民部落へ売る、一貫町あたりへ此の残飯が運ばれるのは大抵朝の六時から七時までの間であるとのことだ、残飯の荷が一貫町へ這入ると丁度青物市場へ青物が来たやうに沢山な細民どもが吾も吾もと桶を持つて買ひに行き、半日分とか一日分を買つて置くことも多いさうである、同じ貧民窟も市内には彼方此方あるやうだが米の打撃から受けて最も悲惨な生活をしつゝあるのは此の一貫町であらう

（『京都日出新聞』1912年7月4日）

次に、米騒動直後、1918年9月の新聞記事を紹介する。上記の記事とは対照的な内容となっている。

○「残飯物語」

〔第十六師団各兵営からの残飯は〕尤も二三年前までは細民隊の買手が多かつたので瞬く暇に捌けて仕舞つて足らぬ勝だつたが本年の米高には残飯屋は繁昌しなかつたといふのは細民連は近年総ての工賃が騰つたのと錢儲口が殖た加減で所謂細民と目せられる本人等は左程困つてゐないのかも知れぬ

（『京都日出新聞』1918年9月2日）

京都も、東京、大阪と同様であった。京都の地方紙には、1915～1916年頃までは買い手が多く、「瞬く暇に捌けて仕舞つて足らぬ勝だつた」残飯が、米騒動期には売れなくなっていたことが記されているのである。

(62) すでに原田敬一、前掲「米騒動研究の一視角——『生活難』をめぐって」（89頁）が指摘している。

(63) 一貫町については、以下の文献を参照されたい。横井敏郎「明治後期の都市と『部落』——京都市を事例として」（『部落問題研究』第105号、1990年5月）。同「明治・大正期における都市の拡大と部落行政の転換——京都市を事例として」（『部落問題研究』第108号、1990年11月）。小林文広『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み』（雄山閣出版、2001年）。高野昭雄『近代都市の形成と在日朝鮮人』（佛教大学研究叢書5）（人文書院、2009年）第2章。

4. 最も米を食べた時代

表11は、年間一人当たり米消費量の変化を示している。大きく捉えると、明治時代から大正時代にかけて、日本人一人当たりの米消費量は上昇していた。そして米騒動期は、一人当たりの米消費量が、第二次世界大戦後も含め日本史上最も高まった時代であった⁽⁶⁴⁾。こういった状況は、大戦景気が進行した1917年頃には、顕在化していた。1917年における『京都日出新聞』の記事は次のように記している。

○「日本の米と火事（上）」

豊^{とよ}葦^{あし}原^{はらの}瑞^{みずほ}穂^{ほの}国^{くに}と昔から云ひ習はされてゐるが如く、米は我が邦の特別の産物である、吾々日本人は主として米を食つて生きてゐるので、米の外に麦は今日でも大分に行はれてゐるが、少し昔になると麦は固より、処によると薩摩芋やら、里芋やらを常食としてゐるもあり、甚だしきは粟や稗で以て露命を繋いでゐるもあつたし、又今日でさへも尚そんな生活を送つてゐる山里も残つてはゐる、併し米食は今日では殆んど普及したと云つて好い、日本人とは日本米を常食とする人類なりと定義して然るべきであらう、

（『京都日出新聞』1917年5月28日）

本稿で、すでに何度も述べてきたように、農村部では当時麦飯が主食だったし、山奥の山村では、アワやヒエなどが食べられていた⁽⁶⁵⁾。しかし一般的には、大戦景気が進行する1917年段階で、「米食は今日では殆んど普及したと云つて好い」という状況が都市を中心に生まれていたのである。

都市においては、肉体労働者の食事も、「外見が不潔で価格の低廉なる割合に質は案外によく、量は勿論豊富」となっていた⁽⁶⁶⁾。この頃、浅草区をはじめとした労働者街では、牛飯屋が増加していた⁽⁶⁷⁾。

次の行政史料は、都市労働者について、衣服や住居は粗末であっても、飲食物は決して劣悪ではなかったことを記している。

○「朝は煮豆で暗いうちに出るが、晩にや刺味で一升酒」

と云ふが如く、一口にどん底生活と云つても、所謂衣食住の中、着衣、装身具や、住

(64) 日本人の米消費について、明治期から昭和戦前期にかけては、大豆生田稔、前掲『お米と食の近代史』が詳しい。また大正期から平成期にかけては、川島博之『食の歴史と日本人』（東洋経済新報社、2010年）を参照されたい。

(65) アワやヒエなどを食べていた山村部で米の常食が普遍化するのには、戦時中の1941年に米の配給制度がはじまってからである。樋口清之『新版日本食物史——食生活の歴史』（柴田書店、改訂新版、1987年）282～287頁。

なお、「山間の村々などでは戦争のおかげで米が食べられるようになったという声をよく聞いた」とも言う。宮本常一・潮田鉄雄、前掲『食生活の構造』14～15頁。

(66) 東京市社会局『自由労働者に関する調査』（1923年、調査時は1922年）109～110頁。

(67) 同上、108～110頁。

表11 日本における年間一人当たり米消費量

(単位：石)

年	玄米換算	白米換算
1880	0.70	0.65
1885	0.76	0.70
1890	0.83	0.76
1895	0.80	0.73
1900	0.82	0.75
1905	0.91	0.84
1910	0.91	0.84
1915	0.95	0.88
1920	0.99	0.91
1925	0.99	0.91
1930	0.98	0.90
1935	0.97	0.90

出典：篠原三代平『個人消費支出（長期経済統計6）』（東洋経済新報社，1967年），および『国勢調査集大成 人口統計総覧』（東洋経済新報社，1985年）より筆者作成。

注：1）表作成に当たり，大豆生田稔『お米と食の近代史』（吉川弘文館，2007年）42～44頁，を参考にさせていただいた。

2）米1石=150kgとして計算した。

3）表の数字は，酒造用などを除いた飯米用の米消費量であり，前後5カ年の平均値である。

4）植民地は除く。

居などは極めて貧弱ではあるが，飲食物に至つては必ずしも劣悪なりと速断する事は出来ない，特に過激な筋肉労働に従事する者や熟練労働をなす者等は，自分の肉体の健康を保持する事に相当な苦心をして居る，即ち単なる嗜好，趣味と云ふ方面からのみでなく，生理的必然の要求からして，相当の質量ある飲食物をとるのである⁽⁶⁸⁾，

そもそも肉体労働者は，食事が不足しては満足に働けない。上記史料中，「相当の質量ある飲食物をとる」食生活の中心には，白米の多食があつた。大戦景気により，都市では貧困層でさえ白米食がごく普通になっていた。

かつて脚気は，どちらかという富裕層の病気であり，それだけ上流階級が白米をより

(68) 同上，110頁。

多く食べていた。しかし、近代日本において産業革命が進行するとともに、白米食が最下層の労働者にも広がり、都会では、むしろ下層の肉体労働者ほど、白米を多食するようになっていた。

○「食料問題観（一）」

日本国民の主食物は殆んど米に限られ、田舎に於ては麦又は其他の雑穀を交へて主食となすも都会の住民は多くは米のみを常食とし、上流となれば肉、或は他の副食物を多く取るも、下層労働者にありては最も多く米を用ゐ、米の飯なれば、僅かに塩又は漬物位を副食として一食を了るが如きの慣習あり、中等階級は下層労働者に比し幾分は少食にして他の副食物を多く採るも、而も尚米を主食とするの慣習は何等異ならず、世界の人種中日本人程此の米に対して強烈なる欲求を有せる国民はあらざるなり。

（『京都日出新聞』1919年2月26日）

1922年の東京における労働者の採食量は、「三食分を合せて五合以上七合⁽⁶⁹⁾」であった。今の我々からするとかなり多い量に感じられるが、肉体労働者が必要なカロリーを白米だけから得るためには、軍隊と同じく、一人一日米6合が必要となる⁽⁷⁰⁾。労働者の間では、「一升飯（10合）食べるようになれば一人前の大人だ」などと語られていたが、次の史料もそういった「一升飯」について記す。

○「米価の暴騰に就きて」

吾輩は一方政府に向つて此勧告をなすと同時に、一般国民に向つて米の節食を勧告するものである、単に米価調節の爲めのみでなく、衛生保健の爲めからである、日本人は余りに米を食ひ過ぐる嫌ひがある、農民、労働者の多くは、一升飯を食ひて其健啖を誇りとして居るやうであるが、十人に八人迄胃酸過多、或は多少の胃拡張を起して居るさうである、米飯を節して魚類肉類を以て之に代用せしむるがよい、

（『京都日出新聞』1919年6月4日⁽⁷¹⁾）

大戦景気にいたる経済成長により、下層労働者にも白米食が普及した。そして、だからこそ、白米を多く食べるようになった下層労働者が、米価暴騰に不満を募らせ米騒動の担い手になっていったのである。一旦、米の味をおぼえると、なかなか元には戻ることはいできない。残飯ではなく、米を多量に食べるようになったがゆえの米騒動、生活水準が上がったからこそこの米騒動であった。米騒動期は、日本人が史上最も多く米を食べるようになった時代であった。

(69) 東京市社会局、前掲『残食物需給に関する調査』（1923年）128頁。

(70) ちなみに成人男子が重労働を行う場合、1日約3000kcal以上が必要とされている。米1合を約500kcal強とすると、米だけでカロリーを摂取する場合、1日約6合が必要となる。これは茶碗約12杯分に相当する。

(71) 「米価の暴騰に就きて」（『京都日出新聞』1919年6月4日）の記事に関しては、神戸大学電子図書館システム・新聞記事文庫を利用した。

5. おわりに

本稿では、第一に、脚気統計を分析することにより、日本の米を中心とする食文化について数量的に考察した。当時の都市と農村では、脚気の死亡割合に非常に大きな差があった。それだけ、都市と農村では、その食生活に、大きな違いがあったのである。また同じ都市でも、西日本の方が、東日本よりも脚気の死亡割合が高かった。やはり、食生活の違いが窺える。また漁業従事者や仲仕も、脚気の死亡割合が高かった。

脚気の死亡割合が高い地域は、米を商品として購入する地域であった。これらの地域では、大戦景気時には、すでにそれだけ白米を大量に食べる習慣が形成されており、米騒動が激化したケースも多かった。脚気の死亡割合は、米騒動と短絡的に結びつくものではないが、米騒動の背景の一つとして、新たな視点を提示することができた。

また本稿では、第二に、残飯屋に関する行政史料や新聞史料を分析して、大戦景気により、都市最貧困層の主食物が、残飯から白米へと変化したことを示した。中でも肉体労働者は、激しい労働を行うため白米を多量に食べる傾向があった。最も貧しい層でさえ米を食べるようになった米騒動期は、つまり日本人が史上最も米を多く食べるようになった時代であった。米に対する需要が、かつてないほど高まっていたのである。

大戦景気による生活水準の上昇は、米騒動前年の1917年頃には、はっきりとした変化として現れていた。農業生産額よりも工業生産額が多くなり、乳児死亡率も大きく低下しはじめた。また都市への人口流入が増加し、都市中間層の形成が本格的にはじまった。いわば、近代から現代への変化が起きはじめていたともいえる。本稿では、1918年米騒動をそういった大きな変化の中の象徴的な出来事と考え、時代の転換点として捉え直す作業を行った。都市貧困層は、生活水準の上昇により、白米を常食化するようになっていた。だからこそ、米価の急騰に耐えられなくなり、米騒動に立ち上がったのである。

本稿は、残飯屋に関して、特に原田敬一による部落史研究、都市下層社会研究の成果に依拠した。従来、部落史研究や都市下層社会研究は、日本史研究全体の中で、やや看過されてきた感がある。本稿では、これら先行研究の成果を脚気統計の分析と合わせることで、米騒動の背景を理解するための視点・考え方の提示を行ってみた。

本研究は、もともと初等・中等教育における授業開発を念頭に置いてはじめた研究であり、歴史研究の成果を歴史教育につなげるため、脚注等に記した多くの先行研究を参照させていただいた。この場を借りて御礼を申し上げます。歴史学の研究成果と歴史教育とをつなぎ、学校教育に生かせるような授業開発を行うことを今後の課題としたい。

〔付記〕本稿は、平成25年度千葉商科大学学術研究助成金による成果である。本稿作成にあたっては、国府台学会経済研究会、在日朝鮮人運動史研究会にて、多くの方々より貴重な御助言をいただいた。皆様方に篤く御礼を申し上げます。

(受理日：平成26年7月18日)

(校了日：平成26年9月16日)

[抄 録]

本稿では、1918年の米騒動を、大戦景気中の象徴的な出来事として、さらには日本近代史の転換点として捉え直す作業を行った。脚気統計や残飯屋に関する史料など、従来の日本史研究では看過されてきた感のある史料をもとに、当時の日本における米を中心とした食文化を分析した。その結果、農村より漁村や都市、そして同じ都市でも東日本より西日本の都市で、白米を多食する傾向があったことを示した。そして米騒動は、漁師町・港町一帯での騒動を発端とし、西日本の都市部で最も激しい暴動となっていった。

産業革命が進行する中、白米食は都市貧困層にまで普及し、大戦景気時には、日本人が史上最も米を多く食べる時代を迎えていた。都市では最貧困層でさえ、主食物が残飯から白米へと変化していた。だからこそ、都市貧困層は米価高騰に不満を持ち、米騒動の担い手になっていったのである。残飯ではなく、米を多量に食べるようになったがゆえの米騒動、生活水準が上がったからこそその米騒動であった。